
今は亡きドワーフ村の思い出

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今は亡きドワーフ村の思い出

【Nコード】

N0752Z

【作者名】

たすく

【あらすじ】

死の女神シーレンの復活……崩壊した故郷……故郷へ帰ってきた一人のドワーフ♀が昔を思い出す……

※自サイトより転載。MMORPG「リネージュ2」を元に独自設定テンコ盛り注意。

第一話 帰郷

ここは異世界。エルモアデン大陸という巨大な大陸。

そのエルモア地方遙か北。四方に高い山脈に囲まれた外部から遮られていたスパイン鉱山地帯がある。

そこには『大地の種族』と呼ばれるドワーフ族がすむ村があった。常に『強い勢力に味方する』政策をとってきたドワーフは他の種族に嫌われているが、彼らの持つ組織力と経済力が巨大な力を持っていた。ヒューマンが支配した現在においても。

しかし、事態は一変したのだった。

シーレンの復活――

過去、ドワーフたちにより討伐され眠りについた『アースワーム・トラスケン』が復活する。シーレンの命を受けたトラスケンはドワーフ村を襲い壊滅されたのだった。

シーレン復活による疫病に打ち勝つことができたドワーフであったが、トラスケンにはかなわない。ドワーフの長老たちは村を捨てることを決める。

そして神聖な力によって保護を受けているといわれる『話せる人の島』へ出向き、再起をはかることになった。

ある日、ドワーフが一人、元ドワーフ村へ帰還した。長く旅へ出ていたのだが、ドワーフ村壊滅を聞き、戻ってきたのだった。

「なんてこと……」

建物は全壊状態。しかもトラスケンと戦ったであろう仲間たちの死体が点在している。

時々、トラスケンのいびきか寝返りか、ものすごい音を立てて地面が揺れる。

「墓も作れる状況じゃないんだね。ごめんね、みんな」

元村の中を歩きながら、そうつぶやき、まだ村にいたことを思い出したのだった。

知った」が露店で売っていた武器。格闘武器と呼ばれるドワーフ村には売ってない武器であった。

「ふう、疲れた」

その場にぺたんと座る。

「さすがに痛いなー。でも、確実にダメージを与えられるからいいかな」

格闘武器は両手武器のため、盾を持つことが出来ない。相手が攻撃をミスをする以外、確実にダメージを負ってしまう。オークらしい武器ともいえる。

「相変わらず、殴ってるねー」

知り合いのドワーフがやってきた。こちらは槍を持っており、モンスターをかき集めては一気に倒すという、別の意味で豪快な狩りをするドワーフだった。

「まあね。で、今日はどうしたの？」

「んー。そろそろ、転職時期だと思って」

「転職？」

「うん。貴女もそろそろ、その時期じゃない？ どっちに進むの？」

「うーん???」

ドワーフは駆け出しのドワーヴンファイターから、収集系のスカベンジャーと製作系のアルティザンに転職が出来る。

「ま、時間はあるし。じっくり決めたほうが良いよ。後戻りは出来ないからね」

転職は一回きり。そのあとはさらなる上位職への転職以外ない。

「うん。で、キミはもうどっちに進むか決めたの？」

「アルティザンになろうかと思っているよ。制作楽しいし」

「制作かぁ」

「うん。でも転職を指導してくれるドワーフって誰だか知らないから、今探してるの」

「とりあえず、旅に出られる年齢になったらそのまま追い出されるような感じだったしねえ」

「あはは…… それじゃまたね」
そう言うのと彼女は道を走っていった。

座ったまま、彼女は考える。

（転職か……どっちにしようかな……）

（スポイルは楽しいし……クリエイトは……あ、ウッドンアローしか作ったことないや。）

（うーん。やっぱ、自分は製作系は向いてないのかな。）

（スポイル、やっぱ、面白いし。そっちに行くか。）

……意外と単純だった。

ドワーフ村の何処かにスカベンジャーになるための試練を与えてくれるドワーフがいるらしいという情報を得る。

（あの人しか居ないみたいね……）

コレクターピピ。噂ではスカベンジャーを極めるとなれると言うコレクター。真偽は定かではない。

（ま、ただの噂よね。）

「スカベンジャーになりたいですって!？」

ピピに聞くと驚かれた。しかも叫ばれるという。

「あの、そんなに叫ばなくても……」

「それはそれは感心な事なのです〜！ 貴女のように賢い方が少なくなつて、近頃では本当に珍しいのです」

「えと、私、賢くないし……」

「アルティザンになれば、一生人の下で死ぬほど働かされるんです〜。重い財布を拝む事は出来ませんよ〜」

（それはそのドワーフのやり方に問題があるんじゃない？ とりあえず、聞いている振りをして試練の情報を得ないと……）

アルティザンの悪口？や自慢話を散々言い続けるピピ。聞いている振りをしているとはいえ、聞いているのが辛くなってくる。

（まだかな〜）

終わらない。

（ねえ、もう、ゴールしてもいいよね？）

変な電波拾ったり。

（……）

話し続ける事、数時間後……

「では、お話ししよう〜」

（ふう、やっと本題だよ。自慢話は聞き飽きたよ。）

心なしかげっそりした表情。ご愁傷様〜という感じで避けて通行していく仲間たち。

それをしり目に気持ちを入れ替えたのだが……

「実は試練について何も知らないんです〜、てへっ」

ぶち。

キレた。

あれだけ自慢話を聞かされた挙句、知らぬとは。

彼女は、怖い笑顔を浮かべながら、両手に武器をセット。殴りかかろうと構えた。

「サア、シノウカ？」

「ちょ、ちょっと待ってください！！！」
慌てるピピ。

「ナニカナ？」

「スカベンジャーは、マスタートーマだけが承認する事が出来るのです」

「マスタートーマ？」

初めて聞く名前だった。少なくともこの村にはいない。

「マスタートーマです」

名前の訂正をしてくるピピ。

「トーマの行方は彼の妹であるミオンが知っています。聞いてみて下さい。紹介状を渡しますから、おちついてくださあい」

「はぁ。」

ため息をつくと武器を外す。多少顔色が変わっているピピから紹介状をもらう。

「それでは、頑張ってくださいね」

「次はないですからね」

「は、はい」

（しかし、疲れた：あーあ、日が暮れ始めてるよ：朝一で来たって言うのに：腹減ったな：）

第二話 怒りの鉄槌!?

「今日も元気だ、飯が美味い! ……さてミオンに会いに行くか」
昨日の事もあり、朝一で行くことにした。ミオンは道具屋の店員なので、とりあえず道具屋へ向かった。

そして、道具屋につくと、ミオンにピピの紹介状を渡す。

ミオンは紹介状を読むと…

「兄を探すんですって!?!」

…と叫んだ。

(また、叫ぶし…… なんか嫌な予感しかしないんですけど……)

「でも、兄はあちこちを回っていて探すのが大変ですわ」

(仕事か何かかな? マスタートンマって名前だし…)

名前を間違えて覚えたらしい。

「少し前にテレポート装置だか何だかを作ったから一層探すのが難しくなったんです」

(……遊び人か、浮浪者ですか?)

「兄を探しますから、その間、私のお仕事手伝ってください」

(手伝わないと教えてくれないんだね……)

しかたがなく、配達の手伝いを始めた。多少の不安はあったが、それを信じるしか今はない。

たまたま、配達先で大地の神官ジメンフのつぶやきを聞く。

(ミオンはまた、兄さんを餌に使い走りを見せてるな… ひひひ…)

(鈍い奴…お前はミオンに騙されているんだ…)

(な・ん・で・す・と・!・!・? あのアマ…!!!)

配達する度に頭に血が上っていた彼女だったが、つぶやきを聞いて怒りが頂点に達した。

鈍足なドワーフとは思えない速度で道具屋へ走り出す。そして、道具屋につくと扉を壊さんばかりに開ける。

「キ・サ・マ」

「次はここへお願いします」

爆発寸前の彼女に対して、次の荷物配達先を指示するミオン。

「キサマシツテイタナ」

「どうしたんですか？　うちの店は迅速配達で有名なんですよ？　私の兄の事を探すことは心配しないでくださいね」

「断る」

「何を言っているんですか？」

「嫌」

ミオンの襟首を掴むと右腕を振り上げる。すでに格闘武器は装着済みだ。

「……知っていたんだろ……最初っから……！」

可愛い顔が鬼の形相に代わっている。

「ひい」

ミオンはそれを見て短い悲鳴を上げる。

「どこだ？」

「あ、兄は今回村野東の廃墟によって、ルシアンの実績を褒め称えるにドワーフの王国の東の端に行くと言ったそうです。最後に北の海辺から広い海を見学すると言ったそうです。それ以上は知りません」

「本当か？」

「ほ、本当ですよ」

「そう……　こ……れ……は……お……れ……い……ね……！」

「へ？」

ミオンを殴り飛ばした。

「ギャパア!?!」

(何でこう、ムカつく奴ばかり……)

数時間後。

「うわぁ!」

道具屋に入ってきたドワーフが悲鳴を上げた。壁の一部になってしまった、ミオンを見たからだ。

「…………… ブツブツ…………… ヒイイイ……………」

と、何か呟いていたという。

「さてと、トンマとやらを探さないと…あいつの兄だからムカつく奴なんだろうね。なんかもう疲れてきた。あの娘のアルティザンへの転職もこんなに大変なのかな?」

そう言いつつ、地図を広げる。

「えーと、廃墟って言ったから炭鉱かな? 炭鉱に海岸に…東の端

か。はあ、全部探すしかないのか。とりあえず近い所から当たるか」

炭鉱。今は使われていないが、モンスターが住み着くようになってしまっている。

「さーて、トンマは何処じゃ」

取りつくし捨てられた炭鉱とはいえ、結構広く深い。モンスターの住処にもなっている場所である。

しかし、彼女の実力なら炭鉱内のモンスターは敵ではなく、襲い掛かってくる奴から殴り倒していった。

そして：

「むゝ。やっと、見つけた…… トンマ……」

炭鉱の奥、螺旋状になった箇所がある。その最下層の広くなった場所に奴はいた。マスタートーマだ。

「あのゝ」

恐る恐る声をかけた。ミオンの兄であるので、何をしだすかわかったもんじゃないかった。

「お、どなた？」

（へ……？）

変な喋り方を気にしながらミオンの手紙を渡す。

「ミオンの手紙？ ふむ、スカベンジャーになりたいの？ じゃ、私が言うとおりにクエストしなさい。」

（……気持ち悪い喋り方。ヒューマンにそういうのがいるって聞いたことがるけど、ドワーフにもいたんだね。オカマ？とかいうの。でも、やっと試練を受けられる。）

「最近、体が甘い物を要求するんだわ。どう思う？」

「……………」

「友達が言うには鉱山地帯のハンターベアーを捕まえると時々出てくるハニーベアーというヤツがいるんだけどほっぺが落ちるぐらい蜜を持っているって。そのハニーベアーを殴り倒してスウィーパーでくなく探して蜂蜜の壺五個だけ持って来てよ」

ハンターベアーは鉱山地帯の西部にいる。何度も拳で語り合っているのによく知っていた。結構強くてやばかったことも何度あった

相手である。

トーマはテイベアの凶鑑を取り出して彼女に渡した。

「これは…？ クマの凶鑑…？ ですか？」

「そうよ。これを持ってないと、いくらハンターベアーを倒してもハニーベアーは現れないわ」

「へ」

「それじゃ、よろしくね」

「はい」

（不安は多量にあるけど… ま、やってみますか。）

第三話 マスタートーマの依頼

彼女は鉦山地帯の西部にやってきた。

海に近く、少し開けた場所だ。目的のハンターベアーはこのあたりに生息している。

「そういえば、何体倒せば目的のハニーベアーが現れるか聞いてなかったな。ま、いいか」

武器を弓に持ち替え、遠距離からハンターベアーを狙い撃つ。当たればこっちに向かってくるので、接近するギリギリまで弓で攻撃する。そして、格闘武器の射程距離に入ったら持ち替えて殴る。ひたすらこれの繰り返しである。たまに休憩挟むが…

「はあはあ。まだ出んのか。結構倒したと思ったけど……」

休憩中につぶやくが出ないもんは出ないのである。

「……続けるか」

「うおりやあああ!!」

殴る。

「てやあああつ!!」

殴る。

「とりやあああつ!!」

殴る。

「ていやあああつ!!」

殴る。

「ちよんわあああつ!!」

殴る。

ひたすら殴りあう。拳で語り合う。

「くっそー！」

今、一体のハンターベアーを殴り倒した。そのとき、魔方陣が現れた。

「へ？」

その魔方陣から毛色の違ったハンターベアーが現れた。

「派手な現れ方を…こいつが、ハニーベアーね」

ハニーベアーにスポイルをかけ、殴り倒す。あまり強くなかった。
「よ、弱い…：　　なんか拍子抜け…：　　おっと、スウィーパーしな
いと」

スウィーパーをかけると壺で得た。中に蜂蜜が入っているようだ。

「これかー。大体二十五匹ぐらいで出てくるんだね。それならよし。ガンガン殴りますか！　こうなったら滅ぼしちゃう」
半分やけくそ気味であった。

「やっと五個そろった…：　　さて炭鉱へ…：　　って…：　　はあ、そうか。

あのトンマ探さない」と…」

疲れきってその場にへたり込む。どうやら、必ずスウィーパーで得られるわけでなく、結果二百匹近いハンターベアーを倒していた。
「炭鉱と海岸と東の端だったかな…？」

地図を広げ、今いる位置を確認する。一番近いのはもちろん海岸。海沿いを走ってみることにした。

しばらく、走っていると海岸の岩山の上に人影を発見。マスタート
ーマだ。

（よかった） 近くにいて　　とととと、ここら辺はなんか出鱈目に強いトカゲが何匹いるから気を付けないと…）

出鱈目に強いトカゲこと、クルーデルリザードマン。今の自分が十人ぐらいいないと倒せないと思われる強敵だ。もちろん彼女は戦ったことはない。

その目を盗んでトーマのいる岩山へ近寄る。そして声をかけた。

「マスタートンマ」

「ん？ 何かしら？」

「依頼の蜜持ってきました」

そう言ってそして壺を渡した。

マスタートーマは受け取り確認するといきなり食べ始める。

「きゃーほんとにおいしい」

無我夢中になっていた。

「あ、あのー」

「あ、あら。ごめんなさいね。美味しくて夢中になっちゃったわ。で、次は怪物狩りだわ。タランチュラを捕まえて奴らが抱いている玉持ってきて。」

「玉？」

「そそ。ハンタータランチュラやプレデタータランチュラが持つてゐるわ。いっぱい　　いっぱい　　持つて来て。少なくとも二十個はね」

「必ず得られるんですか？」

ハニーベアーの時には聞き忘れた事項だ。また、二百匹も倒している余裕はない。

「どうかしら？ あ、でもね。スウィーパー忘れないでね」

そう言っ、タランチュラの図鑑を貰う。

「わかりました」

「よろしくね」

（次の試練ね。転職の試練は一筋縄に行かないわ。でも、壺集めよりは楽かな…）

(さてと、狩りますか。)

海岸線にそって東へ、しばらく進むとハンターベアーの数が減っていき、タランチュラ類が増えていく。そして、ハンタータランチュラ、プレデタータランチュラがうようよいる地帯。

勝手に歩き回っているように見えるが、仲間意識が強い。一体が殴られているとすぐ集まってくる。彼女は、出来るだけ仲間から離れているタランチュラを探して狩ることにした。

「必ず得られるわけじゃないんだ……」

ハンターベアーと同じような狩り方でタランチュラを狩っている。すでに数十体のタランチュラを狩って、わずか数個しか得られていなかったのだ。

「これぞ、試練って感じよね。」

しばらくして…

「ハアハアハア…… 何十匹倒せば揃うのよ……」

目の前のプレデタータランチュラを一体殴り飛ばした。そしてビーズをスウィーパーで得る。

「よっしゃ！ 後一個おー!!」

思わずガッツポーズをとる。

「で、次は…… あう… 固まってる……」

見回すと結構近い場所に三匹ぐらい寄り合っていた。

そこで、弓で一匹を弱らせて殴り倒し、そのまま次を殴る方向へ進めることにした彼女。

ロングレードソウルショットを装填する。武器に装填することで一時的に破壊力を二倍にしてくれるアイテムである。ただし、一回で効果は切れる。連続装填は可能だ。

三対一の壮絶な戦いが始まった。

「オラオラオラオラオラー！ー！」

格闘武器には常にロングレードソウルショットを装填している。ハンターベアーをたくさん倒すことを想定して、大量に持ってきていた。

弓で弱らせていた一匹を倒した。スウィーパー。出ない。

「次っ！」

二匹目。こっちは最初から殴り合いである。そして、倒す。スウィーパー。出ない。

「出ない！ 次に期待して…ラストォ！」

三匹目。全力全壊で殴る。そして、倒す。スウィーパー。出た。やっと最後のビーズをスウィーパーで得ることができた。

「くは… やっと二十個……… これをトンマに持って行けばいいのね。」

その場にへたり込む。流石に疲れ切った。

「でも、また探すのか……トンマ…… 明日でいっか、もう…… 疲れたよ、私は…」

第四話 グルーディン港の村への道

次の日の朝。

「疲れがとれた気がしない…」

とりあえず、マスタートーマを探すことにした。村から歳最寄の炭鉱へ見に行く。

マスタートーマは炭鉱の奥深くにいた。

（いたいた……　なんでこんなのにスカベンジャー認定の権限を与えたんだろ…）

「マスタートンマ」

彼女の中では、トーマではなくトンマで固定されてしまったらしい。

「ん？　何かしら？」

「依頼の玉を持ってきました」

そう言ってトーマへ玉を渡した。

「ぴかぴか光る玉。お疲れ様」

「はぁ…」

「これからこれを私の友達に届ければ試練は終わりだわ」

（これで、おいらもスカベンジャーの仲間入りだぁあ！）

内心ガッツポーズをとる。が、しかし。

「前に借りた酒代をこれで返すんだって言ってよ。友達はグルーディン村で倉庫番してるラウトっていうんだわ」

（……借金を返すために私に集めさせたのか……！！！！　ふざけんなー！！！！）

酷い現実。

「じゃ、頑張ってね」

トーマはそういうと玉を布で包み彼女に渡した。

（やっぱ、兄妹よね。）

そう思うと、拳に力が入る。

「ん？」

「とりあえず殴っとくべきよね？」

「え？」

「うおりやああああ！！！！！」

トーマを殴り飛ばした。

「きゃいん！」

（こんなんでスカベンジャーになれるの？ 何かこき使われている様な気がするわ…）

それから数時間後の事。

「おおあ！」

炭鉱で狩りをしていたドワーフがふと上を見上げたとき、天井の一部になってしまったトーマを見たからだ。

「…………… ブツブツ…………… ケケケ……………」

と、何か呟いていたという。

「あれ、マスタートーマじゃねーか。ま、いっか。しかし、さらに変な趣味を持ったのう……………」

ただの趣味だと思われ、救助どころか華麗にスルーされたトーマであった。哀れ。

トーマをとりあえず殴った彼女はドワーフ村へ戻ってきた。

「そういえば、グルーディン村って何処かな？ 聞いたことないけど…？」

彼女はまだ村周辺から出たことがなかった。それ故にドワーフ村以外の村を知らない。

「情報収集だね」

村人たちやどうやってきたかわからない緑の巨人^{オーク}に聞きこむ。

その情報を統合するとうだった。グルーディン村はアデンと呼ばれる大陸にある港町らしい。

ただ、昔のアデンとエルモアの戦争で国境は断絶状態のため、歩いていけない。もし、歩いて行ってもむちゃくちや遠いらしい。

緑の巨人^{オーク}曰はく、ゲートキーパーでなら行けるとのことで、ゲートキーパーに聞くことにした。

「ちよつといいですか？」

「ナンデショウ？」

ドワーフ村のゲートキーパーウィーフィーは、ドワーフの技術の粋を集めた機械人形である。つねにガシャンガシャンいつている。

「ここから、グルーディン村？へは、幾らかかりますか？」

「グルーディンコウノムラデスネ？ 3,000アデナニナリマス」

(3,000？ あるかなー？)

腰のポシェットから蝦蟇口を取り出して所持金を確認した。

(げ。1,000もない。どうしようかな… これじゃいけないよ。)

ノングレードソウルショットを大量買いしたため、残金がほとんどなかった。

「おまけして？」

「ムリデス」

「だよね」

「ゲートキーパークーポンガアレバ、ムリヨウデオオクリシマスヨ」

「ゲートキーパークーポン？」

「ワタシノエネルギーゲンデアルスターストーンヲ20コモツテク

レバ、ムリヨウデサシアゲテマス」

「うん、わかった。ちよっととってくるね」

「オキヲツケテ。スターストーンハホワイトストーンゴーレムガオトシマス」

「ありがと」

再び海岸線へ向かうことになった。

（痛いんだけど、スカベンジャーのためよね。）

ホワイトストーンゴーレムは比較的数が少ないようだ。

（絶滅危惧種なのでは？）

と、彼女は思ったがとりあえず狩ってみることにした。

ただ、ストーンゴーレムの類なので弓ではほとんど役にただないほど防御力が高い。彼女の狩りのスタイルである引き狩りができない。ここは拳で語り合うしかない。攻撃力も高いので思いつきり痛い。

（痛い… しかも出にくい… でもやるしかない…）

しばらくして、50体ほど倒したころスターストーンが20個揃った。

（これで、グルーデイン港の村へ行ける…！）

急いでドワーフ村へ帰還し、ウィーフィーへ渡した。

「ゴクロウサマデシタ。ソシテアリガトウゴザイマス。コレガオヤクソクノモノデス」

ウィーフィーはゲートキーパークーポンを二枚渡した。

「二枚？」

「イツカイニツキイチマイノツカイキリデス。ワタシシカツカエマ
セシノデ、ゴリカイヲ」

「うん、わかった。じゃあ、さっそくお願い」

そういうと二枚のうち一枚をウィーフィーに渡した。

「リョウカイシマシタ」

ウィーフィーがそう言うと、彼女の視界が暗くなった。

第五話 ボンッキュッボンツとストーン

(なんじゃこりゃあああつつ)

一瞬目の前が暗くなっただと思っただけすぐに明るくなった。

「へ？」

見たことがない景色が広がる。立派な神殿があり、沢山の建物が建っている。なにより、ドワーフ村ではお馴染みの雪が一切ない。

「ほへー。ここが、グルーディン村かー」

とりあえず、おのぼりさんごとく周りを見回した。広すぎてよくわからないので、町の中を探してみることにした。

グルーディンの港の村にはドワーフ村と違い、色んな種族がいる。山の中にいた彼女には物珍しかった。

(うわー。大胆な服着た黒いおねーさんだ。おいらは…着れないな。

)
彼女が見たのは、ダークエルフという種族の女性。青褐色の肌に銀髪が特徴だ。ただ、彼女は少しへこむことになる。

ダークエルフ女性は背が高く(170cm超)、体型もボンッキュッボンツである。それに比べてドワーフ女性は背が低く(140cm以下)、体型はほぼストーンである。

(なんかうらやまぐやしい。種族の違いといえばそうなんだけどね。

)
と、思いつつ見てたら目があってしまう。

「ん？」

(目があってしまった！)

「私に何かようかな？ ヒューマンのお嬢ちゃん？」

「私はドワーフだ！ ヒューマンの子供ではない！」

「あら、ごめんなさい。」

二人が並ぶと視線が思いつき違う。彼女の目線では、相手の胸あたりになっしまう。

（やっぱ、うらやまけしからん。）

「私を見てたようだったから、何かようかなと？」

「あ、いえ。ただ、ここに来たばかりだったから、キョロキョロしていたです。呼び止めてしまったようですみません」

「そうなんだ。そうなるかと探し物かな？」

「えっと、倉庫探そうかとしてたんですが」

「倉庫？　倉庫なら、その街を分断するように走ってる道の向こう側よ」

ダークエルフ女性は、指をさしながら教えてくれた。

「すみません。教えていただきありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして。困ったときはお互いさまよ」と、言って二人はわかれたのだが…

（うゝ。私もあのぐらいになりた…　うらやまぐやしい）
…彼女は相変わらずだった。

道を挟んで反対側にやってきた彼女は、無事倉庫を発見した。中に入り、倉庫番ラウトに話しかける。

「何かようか？」

「マスタートンマからこれを届けてほしいと頼まれたのですが」
玉の包みをラウトに渡した。

「トンマ…？　トーマの事か。」

「これで借金を返すと言っていましたか」

「何だって。これで借金を返すだって？　これじゃ俺に借りた金の十分の一にもならん！」

「は？」

（あの野郎…！　次は土に返しちやる…！　ムカムカ。）

「ふむ： 訳ありのようだな： よし、あんたがあの詐欺師の代わりに一つクエストをしてくれたら借金は返した事にしてやる。どうだ？」

「何で私があんなものの借金肩代わりしないといけないのですか？」

「その気持ちはよくわかるぞ。でもあの詐欺師トーマの奴が俺に必ず返すと預けた品物が何か知ってるか？」

「いえ」

「スカベンジャーの印だ」

「なんだって〜！？ あの野郎そんなものをつつ！ そんな大事な物を……」

「わしの見たところ、スカベンジャーの転職クエスト中だな。まさにあんたが望んでいるスカベンジャーの印だ」

ラウトにはつきり言われ、彼女は頭を抱えた。

「残念だが、これで何で俺の頼みを聞かなきゃいけないだろ？」

「ぐぬぬ」

「奴を土に返す前にやるしかなかろう？」

「ぐぬぬ」

もはや唸るしかない彼女を見て、ラウトはため息をついた。

「とりあえず、話すぞ？」

「…… お願いします。」

（まあ、これも試練ね。そう思わないとやってられんわ。）

彼女はとりあえず気持ちを切り替える。トーマの事は端っこに追いやった。

「まあ、頼みといっても配達を頼みただけだ」

「配達？」

「ああ。 俺には悩みの種の甥っ子が一人いるんだが、こいつがある日自分はドラゴンバレーのモンスターにも品物を売れるとハッタリをかまして友達にからかわれたらしい」

「ド…ドラゴン……」

ドラゴンバレーという場所は彼女は知らないが、ドラゴンという

言葉で恐怖した。実物は知らないが、話ではよく聞いている。その破壊力と強大さを。

「そしたら、次の日倉庫の品物をそっくり持って消えたんだ」

「行ったんですね… そのドラゴンなんたらへ…」

無言でうなずくラウト。

「あんたが行って見つけ出してくれ」

「は！？ 配達じゃないの！？」

驚く彼女。

ドラゴンがウヨウヨいるところに人探し、いやドワーフ探し。自身自身の危険もある。おもわ顔を青ざめた。

「そんな奥に行っていないと思うけどな。勇気があるやつじゃないしな」

「で、でも…」

「で、これを帰還スクロールだと言って甥っ子にこれを利用して戻って来いと言ってくれ。じゃ、頼んだぞ。」

ぱいっとこちらにスクロールを一枚投げよこした。

「……………はい」

とりあえず、気を取り直す彼女。

（怖がってばかりじゃ、前に進めない。一人前になれない！ さてと、ここはドワーフ村じゃないから地図が使えないわ。地図買わないと。）

ドラゴンバレーの場所がわからないので道具屋で地図を買うことにした。そして、地図を購入すると広げてドワゴンバレーの位置を確認する。

（…………… なんじゃこりやああああ！）

グルーディン村は地図で言うと左端にあった。道なりに進んで、グルーディオ城の村、ディオオン城の村、そしてギラン城の村手前の三叉路を北上したところにドラゴンバレーがあった。地図上では右端。

（なんかものすごく遠いのね。ま、行くしかないのよね。）

地図見ながら歩いていたら、誰かにぶつかってしまった彼女。

ぼよん。

（ぼよん？）

なんか変な感触があったので地図をどけると先ほどのダークエルフ女性が立っていた。どうやら彼女にぶつかったらしい。

「ご、ごめんなさい。地図ばかり気になってたんで」

「こちらこそ。あ、さっきのドワーフのお嬢ちゃんね」

「ダークエルフのおねーさん」

実年齢はお互い知らない。見た目でしかも名前も知らなかったの
でそう言ったのである。

（さっきのぼよんっておねーさんの胸にぶつかって跳ね返った音なのね。やっぱ、うらやまぐやしい。）

「地図見ててどこかに行くの？」

「ドラ： いえ、ギラン城の村の方向へ行こうかと思って場所を確認してたんです」

ドラゴンバレーと言ったら、全力で止められそうな気がしたので
言い換えた彼女であった。

「そう。んー、じゃこれも何かの縁。一緒に行かない？ 途中まで
だけど？」

「一緒にですか？」

「ここにあるグルーディオ城の村へ行く途中なのよ。どう？」

「え、でも…迷惑では？」

「ぜんっぜん。まあ、馬車なんてものないから歩きだけどね」

「私は構わないですが…」

「よし、じゃあさくつと行きましょう！」

「はあ」

このおねーさんは多少強引なところがあるらしい。彼女は押し切られるような感じでした。もっともおねーさんの方は強引とも思っていないかったようだ。

（旅は道連れ、世は情けっていうからいいかもね。）

第六話 ドラゴンバレーへの道

ダークエルフのおねーさんとグルーディオ城の村へ向かうことになった彼女。彼女の中ではおねーさん固定であった。

そのおねーさんとの身長の違いから、歩幅が大きく異なる。そのため、おねーさんはあわせてくれていた。ありがたいことである。

おねーさんは何度か行ったことがあるらしく、道すがら、危険度の高いモンスターやスルーしても何もしてこないモンスターを教えてくれた。

彼女にとっては未知の世界である。こちらもありがたかった。

(見た目、私よりつよそーなモンスターばかりだね。)

しばらくして、グルーディオ城の村へ到着する。

「ここが、グルーディオ城の村だね」

「ほへー」

城下町だけあって比較的広く、人も多かった。中央広場には露店が数多く開いている。

「私はここで用事あるからお別れだね」

「短い間でしたが、ありがとうございました」

「いえいえ。だた…」

「ただ？」

「ここから先は、今まで進んできた道にいたモンスターより強いが多いから気を付けてね」

「!？」

「道通りに進めば大丈夫かと思うけど、気を付けることはこしたことはないよ」

「わかりました。ありがとうございます」

「それじゃー、またどこかで会いましょーねー」

おねーさんは笑顔で手を振りながら、露店の多い方へ行ってしまった。

（いつかは恩返ししたいなー。）

露店も気になるが、早々に出発することにした。地図上では左端から右端である。日が高いうちに進んでいこうと思ったのである。

（えっほえっほ。）

道通りに進み、橋へ差し掛かると一陣の風が過ぎた。

（!?!）

エルフだった。足の速さでは全種族最速である。ドワーフごときでは追いつけるレベルではない。

（いーなー。足速くてー。）

しばらく進むとディオンの村が見えてきた。このあたりまで来ると村の近くでもモンスターが徘徊していた。気を付けないと襲われてしまう。

（うひょー。いろんな意味でコエー。）

（多分、勝てない。絶対負ける。）

ディオンの村の中も少しは見たかったが、時間が惜しいのでスルーした。

そしてさらに進んでいくと道が禍々しくなっていく。地図を開くと『処刑場』と書かれている。

道こそちゃんと整備されていないが、不気味な雰囲気をする小道へ枝別れしていた。そちらの方をちらつと見ると、なんかギャーギャーという声やズシンズシン歩く音がする。

（…処刑場というくらいだから、死体とかゾンビとか悪霊とか幽

霊とか妖怪とかバケモノとかとかいるんだろなー。怖いなー。」

怖いので早めに通過する。そして、再びしばらく行くと三叉路についた。看板が立っていたので見ると、『ギラン城の村』『オーレン方面』『ディオン方面』と書かれている。

そこで地図を取り出して確認すると『オーレン方面』へ行けばドラゴンバレーに行けることがわかる。

少し進むとドラゴンっぽいモンスターがそこら中に飛んでいるのが見えてきた。

（うは。あれが噂のドラゴンかぁ。想像より小さいけど油断は禁物だよな、やっぱり。）

少し道を進むと道の隅でぽつんと立っているドワーフを見つけた。

（あいつかな？）

とりあえず話しかけてみることにした。

「あの一？」

「なんや？」

「何しているんですか？」

「いやな、品物売っていたんや。もうちょっとで死ぬところやっただけだな。」

（そりゃそうだよ。）

「ドラゴンバレーの中に羽の生えたメチャ可愛い娘らに乳隠しを売りに行ただけで、歯むき出しておまけに髪を振り乱して追いかけて来んのを必死に逃げて来たんや」

（乳隠して……）

サキュバス族が生息しているようだ。彼はサキュバスに物を売りに行ったらしい。

「もう家に帰りたいわ」

半分泣きそうである。よく見ると肌は擦り傷だらけだ。自慢の髭も少し乱れている。本当に命からがら逃げてきたことがわかる。

（だったら来るなよ……でも、この人かな。ラウトさんの甥っ

子さん。)

「大変なところ申し訳ないんですが、グルーディン港の村の倉庫番ラウトさんをご存知ですか？」

「わいのおっちゃんや」

(どんぴしゃね。)

とりあえず生きてたことを安堵した。さすがに死体を発見しましたという報告は気が重い。

彼女は呆れ顔でラウトより預かったテレポーツスクロールを渡した。

「これは… わいのおっちゃんがよこしたんか？」

「そうです」

頷く。

「おっちゃん」 わいがアホやったんや。戻ったらおっちゃんのことちゃんと言ったから。おおきに。これはここであつちこちさまよいながら拾ったもんやねんけど受け取ってな。わいの気持ちや」

包みに入っていないが、何か布のようなものを貰った。おもむろに広げるとそれは…サキュバスのアンダーウェアだった。つまり下着。

(………… 拾った下着を人に渡すのかああああ！)

思わず、まじまじと見てしまう。

彼女はドワーフの成人女性ではあるが、背が低く(ドワーフ平均身長はある)、体型もほぼストーン(こちらもドワーフ平均サイズ)である。

(しかし…大胆な…はあ、おいらでは着れないな。とりあえず、戻るか…………ん。)

気がつくとも目の前には誰も居なかった。さつさとテレポーツスクロールつかって帰ったようである。

(いつのまに… 一言声をかけて帰ってくればいいのに… っ て、うわ！)

こちらが気が付かないうちにドラゴンっぽいモンスターが近くに来ていたらしい。目があつてしまった。しかも、ニヤリと渡つたようにも見えた。

（これはまずいよね。まずすぎるよね。襲われるわよね。）

ドラゴンっぽいモンスターはゆつくりと獲物を狙うようにこちらに飛んで来る。

(おや~~~~~)

~~~~~)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0752z/>

---

今は亡きドワーフ村の思い出

2011年12月10日21時53分発行